

特集：私たちの学習指導案

■「魅力ある指導案を」ということ

巻頭の「かぜ」で牧野満さんは、「今では『これはどこかで見たな。』という学習指導案も少なくなく、ネットの文言がコピーされ、指導書に書かれている教材観がそのまま使われていることさえある」と嘆き、学習指導案の画一化が授業の画一化を加速させ、面白味のない授業増えてきたと断じています。その上で、今号の特集が、魅力ある指導案を書いてみるための契機にしたいと述べています。

この特集で、どんな指導案が出てくるかとても期待が持てるように思いました。

■ひと味違う指導案づくり

論考では、丸山真司さんが「体育の『学習指導案』再考」というタイトルで、ひと味違う指導案づくりに向けての提起をしています。その中で特に心をひかれたのが次の2カ所です。

指導案は、本来目の前の子どもたちに何をどう教え、どのような力をつけ、どのような子どもたちに育てたいかという教師の思い（思想）や戦略を具体的に反映させた授業展開の作戦図なのです。クラスの子どもの現実を前にどのような単元、授業展開の作戦を立てるのかはそれぞれの教師のこだわりと腕の見せどころだと思います。だからこそ自分自身で自前の指導案をつくらなければ意味はありません。平田知見（2014）は、指導案を書くこと自体が目的となるのではなく、教材を解釈し、教えたいものをつかみ、子どもたちの実態に思いをめぐらし、子どもとの対話を想像するような授業のイメージを膨らませることが指導案づくりの目的だと述べています。

吉本均（1985）は、従来の形式主義的な指導案や指導内容が不明瞭だった「コアカリキュラム論的指導案」を批判し、「呼びかける指導案」を提唱しました。「呼びかける指導案」は、
①教師が教えたいものを明確にすること
②教えたいものを学びたいものに転化するために、子どものつまずきに着目し、つまずきを作り出しながらそれを克服していく過程として授業を計画すること
③子どもの学びが動き出すような教授行為＝「タクト」へと昇華すること
という3つの条件（特質）を備えた授業案だと述べています。

そして「子どものつまずきに着目し…」と「3ともモデル（『ともにうまくなる』『ともに楽しみ競い合う』『ともに意味を問い直す』）の「ともに意味を問い直す」とに関わって次のようにも述べています。

吉本均は、子どものつまずきに着目しその克服過程を授業な中に意図的に仕組むことを重視し、それを授業案に記すことを指導案づくりの原則の一つとしています。指導案における「教師の支援や指導上の留意点」の欄につまずき・トラブル・衝突の予測や仕掛けが記されているのかが重要なポイントになります。ここが授業の「ヤマ場」になるはずであり、「ともに意味を問い直す」実践課題に関わる学びになると思われます。

指導案は他の何ものでもない、その教師が今関わっている学級の、これから取り組もうとする授業について書かれる、世界に一つしかないものであるべきです。そこの書かれる「子ども（児童・生徒）の実態」は一般的なその年代の子どもの一般的な傾向ではなく、固有名詞で表されるような（指導案に固有名詞は出さなくても）その学級に実際にいる一人ひとりの子どもの姿を頭に思い描きながら書かれるものであるべきです。そして、その子どもたちは現在どうあるのか、どのような学習課題や発達課題をもつのか、それを変えていくためにこの学習で何をわからせ、何をできるようにさせ、どのような人と人との関係をつくるようにしたいのか、そのためにどのような教材をつかって、どのようなストーリーの中で学ぶようにするのか…そんなことを思い描き、設計図をかいていくのが指導案づくりだと思います。

そして、丸山さんが言っているように、「ともに意味を問い直す」つまり子どもたちの現在持っている「観」を変え、よりよい発達が実現できるようにするために不可欠なものが、授業の中に「つまずきを作り出しながらそれを克服していく過程」を仕組んでいく、そういう仕掛けをつくっていくことだと思います。

ということで、この後に載っている指導案を、

- ①他の誰でもないこの学級の子どもたちの姿が見えてくるような指導案なのか
 - ②つまずきを作り出しながらそれを克服していく過程がどのように仕組まれているか
- という2点で見ていくことにしました。

■子どもたちの姿が見えてくるか

村末勇介さんの「“性と生”の学習指導案」には、「本学級の子どもたちの様子を見てみると、服装や持ち物など外見を気にするようになったり、相手の言動の理解に苦しみ、喧嘩などのトラブルに発展したりすることも多い。また、学校行事や班・係活動等へのとりくみ方の違いや、考え方の違いを巡って、いわゆる「男女」間の対立も表面化してきている。さらに、性的関心も高まり、雑誌やインターネット等での性情報に接触する子がいたり、アイドルなども含めた異性・同性への接近・接触欲も芽生え始めたりしている子どもも存在する。」と、思春期の入り口に差しかかり始めた村末さん学級の子どもたちの課題を明らかにし、その上で、「思春期に起こる体の内側と外側の変化と理由・個人差」をわからせ、「からだの変化を肯定的に受け止めることが」できるようにし、友だちとの交流を通して学習した内容とそれぞれの“存在”をつなぐことができるようにしたいと目標を立てています。

しかしそのほかの指導案では、取り上げた教材の意味や価値、つまりその教材で何をどのようにわからせることができるのか、その教材によって子どもたちのどのような関係をつくっていくことが可能なのかということは丁寧に書かれていますが、個別具体的な子どもたちの様子は書かれてなくて、その年代の子どもたちの一般的な特徴として書かれているような気がします。

教材の前に（あるいは少なくとも教材と同時に）子どもたちの実態があるべきではないかと思います。同志会では「子どもたちの現実から始める」というようなことが言われていたような気がします。目の前にある子どもたちの姿から見えてくる課題、それをどう克服する、あるいは子どもたちが少しずつでも変わっていくようにするために、何をわかるようになればよいのか、どんなことができるようになればよいのか、どのようなかかわり合いが生まれるようになればよいのかを考え、そのことと関わってどんな教材で教えるのかということが出てくるのではないのでしょうか。指導案にもそういう書き方をしてもらえるとよかったのではないかと思います。

■「つまずき」を作り出し、克服していくための仕掛けが組み込まれているか

山内基広さんは、『『器械あそび』学習指導案』の中の「教師の指導観」の項目の中で「…『異質協同の小集団学習』を採用したい。これは、『器械運動の文化性』を追求する授業においては、『習熟と認識の変革過程』を学習の対象としなければならないからである。すなわち、『できる』（できない）『わかる』（わからない）の過程を子どもに見つめさせ、『つまずき』を『みんなが』共有し、原因を追究するためには、できる子がいてできない子もいる異能力集団でこそ『技術の科学』が客観化されるからである。」と書いています。ここで山内さんは「つまずき」を「できないこと」というように捉えて書いているように見受けられますが、丸山さんの言っている「つまずき」とはそうではなくて、学習の過程で今持っているものの見方考え方ではどうにも立ち行かなくなるような壁にぶち当たる、そしてそこで子どもたち自身が課題をわがものとし、乗り越えるために仲間と一緒に苦闘する、そのなかで今までとはちがうものの見方考え方（観）を仲間と一緒に獲得していく…そういう意味の「つまずき」だと思います。まさに「ともに意味を問い直す」です。

この号の特集では、残念ながら、「つまずき」をどう仕掛けるか、克服していく過程をどう仕組むかについて書いてある指導案はなかったように思います。

丸山さんの言うように、ここが授業の「ヤマ場」であり、この授業で子どもたちが何を学び、どう変わっていくのかということと深くかかわるところなので、指導案はここを中心に書いてほしかったなと思います。「ひと味違う指導案」というのなら、必要と思われることを満遍なく書くのではなく、「つまずき」に関わる部分にうんとウエイトを置いた指導案にした方がよかったですのではないのでしょうか。

■指導案をつくるその裏側こそが大切

できあがった指導案がどのような「形」のものになるか（なるべきか）ということよりも、この特集で伝えるべきことは、指導案をつくるにあたってその裏側でどのようなことが起こっているか、行われているかということではなかったのでしょうか。「形」しか見ない人に提出するための指導案を書く書き方もあるのでしょうか、「授業を構想するための設計図」としての指導案ならば、形としてのものではなく、何をどう考えて授業案づくりをするのかということの方が大切なのではないのでしょうか。「ネットの文言がコピペされ、指導書に書かれている教材観がそのまま使われている」ような指導案ではなく、「自分自身で自前の指導案」をつくらうとする人たちは、その裏でさまざまなことを考え、さまざまな準備をしているはずですよ。

子どもたちが何がわかっていて何ができるか、どんな見方考え方をしているのか正確に捉えようとするでしょう。これまで学習したことの記録を調べたり、アンケートなどの調査をしたりするかもしれません。前の学年の担当の先生にそのころの様子を聞いたりもするかもしれません。

子どもたちの実態に関わっての教材についての研究もします。技術の系統性や技のポイントについて確認するでしょう。学習ノートやそのほかの教具をどう工夫するかを考えるでしょう。校庭や体育館などの場の使い方をどうすれば効率的なのか、グループの数やグループの人数をどうするのか、どういう方法でグループをつくるのか、などさまざまなことを考えなければなりません。

そして何よりも授業の「ヤマ場」となる「つまずき」を作り出す仕掛けを克服していく過程をどう仕組むかということが、指導案を作り上げる上での最も重要なところですよ。最も困難で、また最も楽しいところでもあるでしょう。

でき上がった見開き2ページの指導案と、その指導案作成の裏側を詳しく丁寧に書いたものをセットで載せてくれるとよかったですよ、と思いました。